

## 事例 1

### 「いじめ」が予測される小学生への予防的な指導援助の事例

#### 1. 予測した問題行動 いじめ

#### 2. 対象 小学校 5 年 (A 子・B 子)

#### 3. 問題行動予測の動機

- ・ A 子は、友達が少なく、話ができず孤立している。髪や服装は汚れていて、無造作である。
- ・ B 子を中心とするやや排他的なグループがクラス内にある。

#### 4. 資料

A 子、B 子のそれぞれが気になり、本人、家族関係、学級内の人間関係などを調べた。

##### (1) A 子について

- ・ 成績—下位グループの一人。図工が得意である。
- ・ 性格—気が弱く、依存性が強い。少し親しくなると、つきまとうためうさがられている。
- ・ 家族、及び家族関係

父親 (41 歳会社員)、母親 (38 歳パート)、姉 (中 2)、弟 (小 4) の 5 人家族。すぐ下に弟が生まれたこともあり、特に母親は A 子を「グズ」ときめつけがちで、あまりかまわない。

##### (2) B 子について

- ・ 成績—上の下。基礎学力は高い。
- ・ 性格—勝ち気、見えっぱりで、わがままであるが、涙もろい一面もある。
- ・ 家族、及び家族関係

父親 (35 歳) は離婚のため別居 (調停中)。母親 (38 歳) は同居している祖母と商店経営。B 子は一人っ子として甘く育てられた。

##### (3) ソシオメトリック・テスト (4 月下旬)

クラス替えをしたところであり、席替えや、5 月の運動会の班編成のためにも実施した。

- ・ A 子—排斥数 0 被排斥数 4 選択数 3 被選択数 0 孤立児である。A 子は「犬が好きだ」との理由で B 子を選んでいるが、B 子は「うそつき」だからと A 子を排斥している。この他、A 子は C、D 子を「いじめない」として選択している。
- ・ B 子—排斥・被排斥数 2 選択数 4 被選択数 5 互いに選択しあっている他の 4 人の児童とともに下位集団の 1 つを形成している。B 子を排斥している 2 人の児童は、理由を「こわい」としている。

#### 5. 予測診断 (診断)

A 子は、「グズ」ときめつけられ、家族の間でも無視・放任されて育ち、生活態度は幼く、学力面も低い。一方、B 子は、一人娘として甘やかされて育ったが、最近両親の不和から情緒の安定を欠き、不満感から攻撃的になっている。A 子は、寂しさから、自分と性格の違う B 子を求めまわりつこうとしているが、B 子は A 子にいらだち、排斥している。新しいクラスになったばかりであり、現時点で問題は起きていないが、適切な指導援助がなされないならば、ふたりの間に「いじめ」などの問題行動が起きることが予測される。

#### 6. 予防仮説 (指導仮説)

担任が学級作りを通じて、指導していく。

##### (1) 本人 (A 子・B 子) に対して

① A 子に対しては、学習の個別指導を図りながら、A 子が選択している C、D 子と同じ班に入れ、受容的な雰囲気の中かで自立心を育てる。

② B 子に対しては、心の中の不満感を吐き出させながら情緒を安定させ、特定のグループに偏らない温かな人間関係を作らせる。